The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	沖縄科学技術大学院大学と琉球大学を訪問して（その１）
Author(s)	百瀬，英毅；本庄，浩司；大城，秀治 他
Citation	大阪大学低温センターだより．2014，162，p．19-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

談話室

沖縄科学技術大学院大学と琉球大学を訪問して（その１）

低温センター 百瀬英毅、本庄浩司、大城秀治、笹尾愛（内線171-8966）
E-mail: momose@mat.eng.osaka-u.ac.jp

１．はじめに

大阪大学低温センターでは（他大学の多くの低温センターもほぼ同様とは思いますが)、ヘリウム液化業務に携わっていた技術職員が相次いで定年を迎え、急速な世代交代が進行しています。このような背景がある中、琉球大学において、大学・研究機関等で液化業務に携わる教職員を対象とする勉強会が開催されましたので、大阪大学に最近着任し、低温センター兼務となった若い技術職員らとともに参加してきました。本記事ではその出張についてご報告いたします。

２．訪問大学について

今回の出張では、第１日目（11月27日）に沖縄科学技術大学院大学を訪問させて頂き、大学における安全管理を含む研究支援について施設見学も交えて詳しいご説明を頂きました。第２～３日目（11月28～29日）には琉球大学極低温センターが開催した「液化業務と高圧ガスに関する勉強会」に参加いたしました。この勉強会は、全国の低温センターなどから参加した皆さんがヘリウム液化業務の基本、安全教育への取り組み、高圧ガス保安法対応、設備検査の方法などについて相互に教え合ったり、ざっくばらんな雰囲気の中で説明し合ったり、極低温センターの設備を使って解説し合ったりとする形式で進められました。

詳しい内容や参加しての感想などは、次号、若手職員から寄稿してもらえる予定になっておりますので、是非ご期待頂ければと思います。今号の執筆担当からは、今回訪問させていただいた沖縄科学技術大学院大学と琉球大学のご紹介をさせて頂こうと思います。

２－１．沖縄科学技術大学院大学について

沖縄科学技術大学院大学は、2001年に沖縄・北方対策、科学技術政策担当であった尾身幸次内閣府特命担当大臣が提唱したもので、有馬朗人元東京大学総長が座長を務めた構想検討会にて検討が進められたものです。翌年（2002年）に開催された沖縄復帰30周年記念式典において、小泉純一郎内閣総理大臣が沖縄科学技術大学院大学の推進を表明して、大学設置に向けた動きが現実化していくことになります。その後、2005年には大学設置の推進母体となる独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構が設置され、キャンパス造成工事などに着手。一方、大学としては、自主性と運営の柔軟性を尊重する観点から特別な学校法人を設置することとなり、関連法案が2009年の国会に提出

されて沖縄科学技術大学院大学学園法として制定されました。政府が運営経費の大部分を拠出するものの、法律上は私立大学という非常にユニークな大学として発足することになりました（類似した設置形態としては放送大学があります）。2011年に学校法人沖縄科学技術大学院大学学園の設立が認可され、沖縄科学技術大学院大学が正式に発足しました。秋入学制を取っており、2012年９月に初めての学生を迎え、今回見学した時点では２期生が入学したところ、とのお話でした。３年後に大学院１～５年生が全て揃った段階でも、教員１名に対して学生は２名程度となるように学生定員を定めるなど、少人数教育を行っているとのことでした。

そして、教員や学生の半数以上は外国人であり、学内での掲示物は英語が併記されていました。建物も国立大学の直方体の建築物と異なり、曲線が多用された柔らかいイメージを与える建物群により構成されており、建物内部では異分野の研究者が自然と交流できるように研究者の動線を意図的に交差させるなど、いろいろな仕掛けが随所に見受けられました。窓から見える風景も沖縄特有の青い海と亜熱帯の豊かな森のため、外国の研究機関にいる錯覚を呼び起こす環境がそこにはありました。

写真　沖縄科学技術大学院大学から見えた風景

２－２．琉球大学について

琉球大学は、太平洋戦争後の米国占領下において、米国琉球軍政本部教育部長が設置計画を立案して、連合軍最高司令部琉球局長と沖縄民政府文教部長らの視察を経て、首里城趾に設立されることになりました。1950（昭和25）年には建物等が竣工し、最初の学生が入学したとのことです。後追いで、大学理事会の機能を有する琉球情報教育委員会が設置されたり、大学に関する基本法（琉球列島米国民政府令）が制定されるなどし、翌1951（昭和26）年に開学記念式典が挙行されたとのことです。物資のなかった当時、時鐘の代わりとしてガスボンベが打ち鳴らされたそうで、そのボンベが「開学の鐘」として現在の大学本部横に記念碑となり設置されています。

その後、しばらく米軍からの資金により運営が続けられましたが、琉球政府立法院において琉球大学設置法と琉球大学管理法が制定され、1966（昭和41）年からは琉球政府立大学に移行しました。

さらに、1972（昭和47）年、沖縄の本土復帰に伴い、国に移管され国立大学となりました。1977（昭和52）年からは現在のキャンパスである千原キャンパスへの移転が始まり、医学部附属病院の上原キャンパスが移転される1984（昭和59）年までこの作業が続くことになります。

ちなみに、琉球大学が移転した跡地は、首里城公園として整備がされ、琉球国王の居城であった首里城も再建されて、現在は沖縄観光の名所の１つになっています。首里城周辺には琉球大学の痕跡が多数残っているそうなので、観光で訪れた際には探索してみては如何でしょうか。

３．この続きは…

この記事の続きは、今回の出張に参加した若手の技術職員の皆さんに執筆してもらう予定にしております。次号をご期待頂ければと思います。

謝辞

沖縄科学技術大学院大学の訪問にあたりましては、研究安全セクションの田中俊憲リーダー、施設管理セクションの甲斐敦夫リーダーをはじめ、多くの皆さまにお世話を頂きました。

琉球大学の勉強会にあたりましては、極低温センターの仲間隆男センター長、宗本久弥技術専門職員、ならびに、関係の皆さまに大変にお世話になりました。

この紙面を借りまして感謝申し上げます。

お詫び

本記事（その１）は、前号（No.161、2014年１月号）に掲載する予定でしたが、編集会議の後、冊子の製作段階で原稿を欠落させてしまい、掲載洩れとなりました。前号の編集後記では、書かれてある内容と記事構成が異なっていたために、読者の皆さま、関係の皆さまに大変ご迷惑をお掛けしました。申し訳ございません。

改めまして本号に（その１）と（その２）の記事を連続して掲載させて頂きますので、ご高覧頂けましたら幸いです。なお、記事中の「本号」「前号」「次号」は原稿のまま掲載しておりますので、適宜「本記事」「前記事」「次記事」と読み替えて頂ければ幸いです。

大阪大学低温センターだより

編集委員長　清水克哉